

集

俳句フォーラム

2022年4月 第83号



悼小笠原妙子さん

若泉真樹

銀河の尾郷に伸びゆくレクイエム
身命に秋気さざ波人悼む
正真を求めて生きて天の川
冬紅葉の曼荼羅に入る禽の声
歎異抄繙いてゐる小六月

菊祭

大山夏子

懐かしい匂い小春の本屋街
小春日和活字のおしゃべり心地よく
今更の菊の品位を菊祭
猿回しの猿も拍手す菊祭
拍子木の響く夜警の寒さかな

黄落

石川東児

敬老の日孫の仕掛けしオンライン
今日の月仰ぐ異郷に妻と居て
痩せ秋刀魚北辺の海波高く
黄落や繰り返さるる人の業
天が病み地が病み人も秋湿り

秋日和

仁上博恵

秋日和五感全開満喫す
コスモスを活けて一人のテイタイム
秋高し天まで音符届けよう
鷺一羽氷雨の中を対岸へ
金色に染まる参道暮るる秋

空に

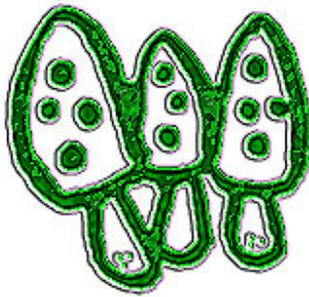
瀬戸美文

秋の雲旅立つ人を空に追
逝く人に思いを寄せて十三夜
亡き人を偲ぶ無花果のワイン煮で
コンピニに寄りて家路や月今宵
渋抜いた柿一箱に感謝して

鴟の空

日置游魚

浮世は夢高く遠くに鴟の空
まだ生を知らず朽葉は地に還る
瑞々しき嬰の頬構う小春の日
ジーンズの破れ誇示して大マスク
雪の夜の静謐知らず生きにけり





樹木医の診断書

大山夏子

押入れに古い地球儀震災忌
風邪気味てふ口実多し断りの
食糧難を生き抜き新嘗祭想う
木免は居眠りが好き檻の隅
冬の園に樹木医の診断書

寒椿

江口九星

寒椿もう咲いている亡父の声
地球儀を孫に送りし雪降る夜
遅咲きの金木犀に蝶憩う
熟しきった柿に小躍り雀らは
雨降る中秋ので虫もくもくと

月の道

渡辺節子

星なき夜舟人誘う月の道
逝く秋を鍵盤にのせ別れの曲
潮の香も焼いて椎茸浜で食う
ハナミズキの紅葉異郷を想い出す
渡り鳥ついてゆきたし南の地

乞食行

中川のぼる

転々と古地図の中の秋探す
恍惚の時の非情や柿紅葉
冬空や乞食行の僧独り
溪川は木霊の褥冬の月
古日記軌跡は消せぬ若き日々

潮香

伊藤昌枝

新藁を刻みし匂い幼年期
鳥渡る防災食品入れ換えて
潮の香を吸って色付く蜜柑山
フラダンス枯葉を連れて催せり
山眠るダム湖に襖打つ響き

冬の鳥

吉宇田麻衣

冬の鳥教えてくれた景色あり
小休止なるべく長く冬茜
冬めいて電光見紛う街模様
林檎煮て部屋に残りし香にほっと
根菜についで目が行って秋はじめ

旅の空

楠本和弘

方舟の影尋ねたり冬満月
昼食はむかご飯なり木曾街道
ついと来て水に消えたり秋茜
黄落のなか歩みたる是色かな
秋の花我が自転軸乱れおり

踏む

渡部恭子

にらめっこ笑い転げて秋天へ
温暖化を紐解く数式秋深し
古暦の吐息しがらみ抜けて来て
落ち葉踏む音は原点回帰なり
ワルツ踏む銀杏降るふる並木道

歪み

小澤えみ子

大根を使い切つたる料理かな
ラ・フランス食べ頃を待ち眺め入る
温暖化の地球の歪み冬ざく
数え日となりて補う置き菓
歳晩や郵便局の置き眼鏡

恋の詩

酒井たかお

秋うらら転んでもまた鳩ぽっぽ
木の実降る鼻欠け地蔵目がけては
掃けば散るいたちごつこの枯葉かな
恋の詩 駅まで続く 枯木星
友逝きて知る現世の冬の旅

回転木馬

由良則子

流れ星追って回転木馬かな
衣食住足りて小春の微睡むや
鷹渡るふいに手紙を書きたくなる
着地点すこしずつれたる黄落期
人類の野望の善悪冬銀河

冬ごもり

高畑太朗

うそ寒や二転三転する主張
同意なき転職なれど栗ご飯
赤い羽根かつては声を枯らせしか
冬空はビルで細切れ中央区
来年も担い手ありや冬田佇つ





澁澤像

都築繁子

秋風や蓮池わたる友の声
一人占むベンチ九月の資料館
高階の友誘う雪の富士を見に
さりげなく老いが近寄る神の留守
落葉降るフロックコート
の澁澤像

昔の記憶

田中藤穂

秋の庭蟲の声せぬ異変かな
落葉して空広くなり門の前
医院のドア桜落葉の吹き溜まる
さまざまな昔の記憶冬の雨
冬三日月椎の大樹の上
にあり

無石さん追悼

篠田純子

色なき風赤門くぐりみ空へと
錘にて鉄扉止ある秋の寺
酔芙蓉本日田端句会なり
翻る足裏さはやか背負投げ
残る虫昼の日向に鳴き合へる

櫛落葉

大山夏子

亡き友に出会いし辺り秋惜しむ
小春日や本の匂いの街通る
櫛落葉踏むまいと避けつまづきぬ
竹筥休む暇なし櫛落葉
銀杏の実不意に落ち来る爪先に